

---

# 二者択一

坂田火魯志

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

一者挾一

### 【ZZマーク】

ZZ0635

### 【作者名】

坂田火魯志

### 【あらすじ】

将暉はきになる相手が一人いた。どちらに告白しようかと悩み選んだのは。オムニバス形式の作品です。恋愛ものになります。

# 第一章

## 一者押一

この時だ。彼は悩んでいた。

首藤将暉は大学生だ。少しだけ吊りあがつたはつきりとした二重の目に眉間から端にいくにつれ濃くなつて太くなる眉を持っている。顔立ちは涼しげで唇は薄いピンクだ。細い頬をしていて黒い髪から見える耳が大きい。

背は普通位で整つたスタイルである。その彼が今悩んでいた。

その彼にだ。ほぼ同じ顔の母が尋ねた。

「どうしたのよ、一体」

「うん、実は」

彼はその母に悩みを打ち明けようかと考えた。少し考えてからこう言うのだった。

「好きな人がいるんだ」

「あら、あんたもそういう人ができたの」

母はそれを聞いて興味深そうな声をあげた。

「よかつたじやない」

「ううん、それはそうだけれど

「何か嫌なの？」

「嫌じゃないよ」

それは否定するのだった。

「ただね」

「ただ？」

「二人いるんだ」

こう言うのだった。

「実は」

「二股とかいうの？」

「そつなるかな。同じ大学の娘でさ」

その娘がどういった娘なのかも話すのだった。

「どっちもね」

「どっちもなの」

「一人は白い可愛い服を着てさ」

「ここから話すのだった。」

「凄く可愛い女の子なんだ」

「そうなの」

「そしてもう一人は」

もう一方の娘についても話すのだった。

「黒い。ええと」

「黒い？」

「ゴスロリっていうのかな」

その娘の服装を思い出しての言葉だった。

「そういう服の女の子でさ」

「その娘もなのね」

「どっちもさ」

彼は言うのだった。

「凄く可愛いんだよね」

「二人共好きなのね」

「大好きだよ」

実際にそうだというのである。

「いや、本当に」

「けれど相手はね」

「一人じゃないといけないしね

「付き合つなら一人にしておきなさいよ」

母の言葉はここでは忠告になっていた。

「それは絶対にね

「二股はよくないよね」

「よくないし災いの元よ」

そうだというのである。

「それはね」

「ああ、やつぱり」

「どちらかにしなさい」

母の言葉は強いものになつた。

「いいわね、それで」

「うん、わかつたよ」

「それでどちらにするの?」

もう早速このことを聞つ母だった。

「それで」

「ううん、そうだな」

彼はここで考えたのだった。そうしてだ。

・白い娘を選択 第一章へ

・黒い娘を選択 第三章へ

## 第一章

白い娘を選んだ。そうしてであつた。

大学に行く。そしてその娘を探した。

「ええと、あの娘は」

キャンバスの中を歩き回る。そしてであつた。

何しろ意識しているのですぐに見つかった。その娘にだ。  
黒いロングヘアではつきりとした強い光を放つ目だ。切れ長で二  
重である。口元は引き締まり整っている。背は割かし高く一六六は  
ある。

白くひらひらとした丈の短いスカートに同じ色のブラウスとカーディガンである。その姿がまさにトレードマークになっていた。  
スタイルは胸はあまり大きくはないが白くひらひらとしたスカートから奇麗な脚が見える。その彼女の姿を認めてすぐに言つのだつた。

「あの」

「はい？」

「ええと、僕は首藤将暉といいますが  
「経済学部のですね」

「えつ！？」

向こうから所属の学部を言われて思わず声をあげてしまった。

「知ってるんだ、僕のこと」

「前から気になつてましたから」「  
にこりと笑つて話す彼女だった。

「私はですね」

「ええと、御名前は」

「松本凜です」

自分から名乗ってきた。

「教育学部の二回生です」

「そうですね、確か」

「それで首藤さんも一回生ですよね」「」のことも知っている彼女だった。

「そうですね」

「ええ、その通りですけれど」

「それで今ここに来られたのは」

凛から言い続ける。

「デートにですね」

「うつ、それは」

「私をデートに誘いに来てくれたんですよね」

にこりとして話す彼女だった。

「そうですね」

「その通りですけれど」

「じゃあ何処ですか？」

ここでも彼女からだつた。

「何処に行きますか？何時何処に」

「次の日曜に」

彼女のペースで話が進む事に戸惑っているがそれでも言ひ将暉だつた。

「場所は野球場で」

「甲子園ですね」

「ええ、そこで」

「確か。首藤さんは阪神ファンですよね」

「えつ、それも知ってるんですか」

「ずっと私のこと見ててくれてましたよね」

そのことも気付いている彼女だった。既にだつた。

「ですから。私はソフトバンクファンですけれど」

「パリーグ派だったんだ」

「けれど巨人は嫌いですか」

これはきっと言う彼女だった。

「阪神対巨人ですね。観ましょっ

「はい、それじゃあ」

こうして彼女のペースで阪神の試合を観に行くことになったのだ  
つた。

第四章へ

黒い服の娘に告白することに決めた将暉は大学に行き彼女を探した。その時に友人に協力してもらつた。

そうしてだ。教育学部の棟によくいることがわかつた。友人と共にそこに行く彼だつた。

そこに行くとだ。真っ黒く装飾の多い、まさに「ゴスロリ」といった服装の女の子が出て来た。髪は黒のロングヘアで切れ長の強い光を放つ目を持っている。眉は細く流麗なカーブを描いている。

ストキングは太腿までだ。やはり黒だ。その彼女が名乗つてきた。

「松本凜といいます」

「松本さんですね」

「はい」

おずおずとして答える彼女だつた。

「あの、それで一体

「実は

将暉からだ。言つのだつた。

「今度の日曜ですね」

「日曜ですか

「よかつたら甲子園に行かれますか」

「こう提案するのだつた。

「僕と一緒に」

「貴方とですね」

「あつ、僕の名前は首藤将暉といいます」

「ここで名乗る彼だつた。

「経済学部の一回生です」

「経済学部の方ですか」

「ええと、松本さんは教育学部ですね」

「はい、そうです」

「くくりと頷く彼女だった。

「それで私も同じです」

「一回生ですか」

「はい」

「その通りだといふのである。

「同じですね」

「そうですね。それでいいですか?」

「デートのことですね」

「嫌ですか、野球は」

「いえ、御願いします」

おずおずとした声での返答だった。

「それじゃあ」

「はい、じゃあ今度の日曜に」

「御願いしますね」

こうしてだつた。将暉は笑顔で応えた。そうしてであつた。二人はデートすることになつたのだった。将暉の望み通りになつた。

将暉は駅で凜と待ち合わせる。すると彼女はあの白い服とやけに大きな白い鞄を持つてやつて來たのであった。

彼はその鞄を見てまず言つた。

「ええと、それは

「鞄のことね」

「うん、それ何かな

「こう彼女に問うのであった。少しきょとんとした顔で。

「その鞄は

「あつ、これはね

「それは？」

「後でわかるわ

「こりと笑つて彼に言つのであった。

「後でね

「後でねつて

「まあまづは野球よ、野球

凜は話を遮つてきた。

「行きましょ

「うん、それじゃあ

「話してだつた。甲子園に向かう。そして一塁側に座るのだった。

「そうして応援する。まずはだ。

「二人はグラウンドを見てだ。それで言ひ合つ。

「それでだけれどさ

「どちらが勝つかね

「うん、どちらかな

「話す将暉だった。

「果たしてどちらが勝つかな

「多分だけれどね」

ここで凛が彼に話す。

「今日は阪神が勝つわね」

「相手がマエケンでも？」

「うん、それでもね

「勝つというのである。

「何故かっていうとね

「うん、どうしてなの？」

「ほら、今日のナインの動き」

グラウンドにいるそのナインの動きをだ。見ての話だった。

「いいでしょ

「そうかな。ちょっとわからないけれど

「特に城嶋がね」

キャッチャーである彼を見てだ。凛はまた将暉に話す。

「凄く動きがいいから」

「そういえば普段より元気かな」

「そうよ。だからね

「阪神が勝つんだ」

「兄貴もいいし」

凛は今度はレフトを見た。そこには金本がいる。彼も見て話すの

だった。

「今日もね」

「兄貴なあ

「肩はまだ万全じゃないけれど

それでもだといふのだ。

「それでもね。やれるわ

「そうだったらしいけれどね」

「まあ観ていたらわかるわ。阪神今日は打つわよ

「是非そうして欲しいね」

「こんな話をして試合を観るのだった。するとだ。

凛の話通りだった。阪神打線は序盤から打ちまくる。

それでだ。気付けばだ。

「五回終わって十点入れたね」

「もう試合は決まったわね」

「そうだね。ピッチャーは今は不安だけれど」

それでもだと。将暉も言つ。

「それでもね。このままね」

「いけるわよね」

「いけるよ」

その通りだと話す彼だった。

「何か言つ通りになつたけれど」

「凛でいいわよ」

「名前呼んでいいんだ」

「ええ、是非ね」

こう言つてだつた。そうしてである。

試合を最後まで観る。結局そのまま阪神が勝つた。本当に凛の予想通りだつた。

それで試合の後マクドナルドに入つてだ。そのことを話すのだった。

「いや、本当にさ」

「まさかと思つたでしょ」

「正直今日はまづいかもつて思つたよ」

実際に素直に話す彼だった。チーズバーガーを食べながら。

「マエケンだから

「マエケン怖いの？」

「いいピッチャーだからね。野球はやつぱりピッチャーじゃない

「それはそうね」

「だからね。打てるかどうか心配だつたけれど

それでもだというのである。

「打てたね」

「そうね。それでだけれど

「うん。何？」

「」の後どうするの？」

「」の後ね

「そう、どうするの？」

また将暉に話す。

「これからね

「そうだね。後は」

「後は？」

「飲みに行く？」

こう提案する彼だった。

「居酒屋か何処かに」

「じゃあバーはどうかしら」

「バーね」

「そう、いいお店知ってるのよ」

彼女から話してだつた。そうしてだ。

彼等はだ。その行く先を決めた。そのバーに行くとだ。

あえて照明を暗くさせた大人の雰囲気を醸し出す店に入るとすぐ  
だつた。凛は将暉に対してこんなことを言つてきたのだった。

「あのね」

「うん、いいお店だね」

「そういうのじゃなくて」

「そうではないというのだ。

「ちょっとね。カウンターで待つてて」

「あつ、うん」

トイレに行くというのだ。それは言葉の外にあり行間を読んでの  
やり取りだつた。彼はカウンターに向かつた。凛と一旦別れてだ。  
その時にだ。凛はくすりと笑つて彼に囁いてきた。

「」のお店黒を基調にしてるわね

「うん」

「 そう、黒だからね」

こう囁いてだつた。彼女は一囁姿を消したのだった。  
そしてであつた。カウンターの彼の前に出て来たのは。

第六章へ

## 第五章

凛はおずおずとしてだ。将暉に言つてきた。

「あの」

「うん、中に入らう」

「はい」

彼に寄り添うようにして彼の言葉に頷く。やつしだつた。甲子園の中に入るだつた。その甲子園はだ。

「一塁側ですよね」

「阪神ファンだからね」

だからだと答える彼だつた。

「そこでいいよね」

「はい」

いくりと頷く凛だつた。

「御願いします」

「さて、試合を観ようか」

いつして一人は一塁側に座つた。そして野球を観るのだつた。試合がはじまるどだ。凛が小さな声で言つてきた。

「今日の試合ですけれど」

「今日の試合?どっちが勝つか?」

「多分ですけれど」

いつ前置きしてから言葉だつた。

「阪神が勝ちます」

「それ、わかるんだ」

選手の皆さんの動きがいいですから  
だからだといふのである。

「それで」

「選手の動きがね」

「特にですね」

凛は小さな声だがそれでも言つた。

「城嶋選手と金本選手が」

「調子いいんだ」

「絶好調です」

そこまでだとだ。彼女はグラウンドの彼等を見ながら話す。

「今日は」

「じゃあやつぱり今日は」

「はい、勝てます」

「ピッチャヤーがマエケンでも?」

彼はここで相手のピッチャヤーの名前を出した。

「それでもなんだ」

「幾ら調子がよくてもそれでもです」

凛の言葉は強いものだった。

「今の阪神の選手達はあの人よりも調子がいいですか」 8

「勝てるんだね」

「はい、そうです」

「うう言つたのだった。そしてだ。

二人は試合を観る。試合は凛の言葉通り阪神打線が爆発してだ。大差で勝利を収めた。

それを観てだ。将暉は満足した声で言つた。

「本当にそうなったね」

「はい、よかつたですよね」

「うん、阪神が勝つとね」

それでどうかというのである。

「それだけで日本は元気になるからね」

「元気にですか」

「だって阪神ファンが日本で一番多いじゃない」

今ではそうなのだ。最早巨人ファンよりも多くなっているのである。

それでだ。将暉はうう言つたのである。

そしてだ。上機嫌で凛に話すのだった。

「機嫌がよくなつたからね」

「はい、そうしてですか」

「試合が終わつたらビデオしようかな

「何処か楽しい場所に行かれますか」

「そうしよう。それでね」

「まずはだ。ここだというのである。

「お腹空いたからマクドナルドにまず入つて」

「そうしてですか」

「それから居酒屋なんてどうかな

「酒というのだ。

「そこで阪神の勝利も祝つてね」

「そうですね。それじゃあ

「それじゃあ？」

「いいお店知つてます」

「凛からの言葉だ。

「飲まれるのでしたら

「養老の滝？魚民とか？」

「いえ、チエーン店ではなくて

居酒屋もチエーン店が多くなつてゐる。またそうした店の酒や料理も実に美味しいのだ。実は将暉はそうした店に行こうと思つていたのだ。

ところがだ。ここで凛が言つのである。

「バーですけれど

「バーなんだ

「そこでは駄目ですか？」

「つていうかバー知つてるんだ

将暉にとつてはこのことが意外だつた。この場合の知つているとは通つてゐるという意味である。

「意外だね」

「意外ですか？」

「うん、かなり」

実際にこう言う彼だった。

「それでも。バーだね」

「はい、どうされますか」

「そこ案内してくれるかな」

こう言う将暉だった。

「よかつたらね」

「はい、わかりました」

こうしてだつた。彼等はマクドナルドの後でそのバーに入る。わざと店の中を暗くして雰囲気を醸し出させているバーだ。そこに入つたのだ。

入るなどだ。すぐにだつた。

凛はおずおずとした態度で将暉に言つてきたのだった。

「先にカウンターに行つていて下さい」

「ああ、わかつたよ」

何故先に行くかはわかつていた。トイレだ。

しかしそれはあえて言わずにだ。それで一人先にカウンターに座る。

そうしてそこにいる。そこに来たのは。

## 第六章

何とだ。あのもう一人好きだった黒いゴスロリの少女が将暉のところに来てだ。いつも会ってきたのである。

「こんばんは」

「えつ、君は」

「はい」

いつも会つてある。態度はおずおずとしたものだった。

「あの、私は」

「あの、まさかと思つけれど」

将暉は事情を察した。そして彼女に会つてた。

「凛さんだよね」

「はい、そうです」

その通りだといつのだ。

「ずっと私のこと見てくれてましたよね」

「うん、それはね」

その通りだと答える。どちらもだ。

「うん、それにしても」

「ギャップが凄いですか」

「うん、とてもね」

「けれどどちらの私も好きでいてくれてましたね」

凛がここで言つのはこのことだつた。

「そうですよね」

「うん、それはね」

その通りだといつ彼だつた。

「その通りだよ」

「どうもです。それで」

「それで?」

「どちらの私も見てくれてましたから」

それでだとだ。凜は話す。

「縁があればと思ってました」

「それはわかつたけれど」

「わかつたけれど?」

「いや、何でそうして対象的な格好してるのかな」

「彼が言うのはこのことだつた。」

「それは」

「どちらの服も好きですか?」

「それが理由だつた。」

「ですから」

「それでだつたんだ」

「いけませんか? それは」

「いや、いいよ」

「それはいいといつた。」

そのまま、「スロリの彼女とバーで飲むのだつた。彼にとつては幸せな結末だつた。相手は一人だがまさに両手に花だつた。」

二者択一 完

2010・11・5

## 第七章

彼女が戻つて來た。しかしだ。  
やつて來たのはだ。ゴスロリの彼女ではなくだ。彼が好きだつた  
もう一人の相手だ。白服の彼女が微笑んでやつて來たのだ。  
「お待たせ」  
「お待たせつてことは」  
「そうよ、私よ」  
「こう言つてであった。  
「凛よ」  
「全然違うね」  
「けれどどつちの私も見てくれてたわよね」  
「うん、それはね」  
「その通りだという将暉だつた。  
「その通りだけれど」  
「だから。待つてたのよ」  
「だからね」  
「この“デート”を？」  
「そう、人は自分を本当に好きな人を好きになるものじゃない」  
相手が好きなら自分もというのだ。無論その逆もある。  
「だからね」  
「それで今もこうして」  
「そういうことよ。それにしても」  
「それにしても？」  
「本当に全然違う服装だつたのに」  
凛が今度言つのはこのことだつた。  
「それでも私だつてわかつたのね」  
「あつ、うん」  
まさかここで別人と考えていたとは思わなかつた。それでの言葉  
だつた。

そうしてだ。彼は言うのだった。

「まあ。好きだから」「

「有り難う。じゃあこれからもね」「

「うん、これから?」「

「どちらの私も宜しくね」

笑顔で言う凛だった。

こうして将暉は凛と付き合つことになった。彼は何時の間にか両手に花ということになった。相手は一人でもだ。そうなつたのである。

## 二者択一 完

2010・11・5

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n9063s/>

---

二者択一

2011年5月1日21時55分発行